

2022年度 入試問題

一 次

国 語

注意

- この冊子は18ページまであります。
- 問題は□から□までです。
- 解答用紙は冊子の中ほどにはさみこまれています。
- 時間は50分です。
- 解答はすべて解答用紙にていねいに書いてください。
- 記述は解答欄^{らん}内に収めてください。一行の欄に二行以上書いた場合は、無効とします。
- 解答用紙のみ回収します。

渋谷教育学園
幕張中学校

一 次の文章は、桑原武夫「ものいいについて」(一九四六年)の一部である。これを読んで、後の問に答えなさい。

芭蕉に「ものいへば唇さむし秋の風」という有名な句がある。私はこの句を好まない。(中略)それは、私がものをいうことが相当以上に好きであるという生れつきによるのだろうか、そればかりではない。

うるさい人の世を多少とも渡って来た人間には、この句の真实性を身にしてみても感じ、思わず「ものいへば唇さむし秋の風」と呟きたくなる瞬間も稀れではないであろう。人間の真实性を現わしているという点において、この句は文学的に一応の成功を収めているといえよう。しかしその真实性が大らかな広い、正しい人間性に根ざしているか、どうか。またそれが、一つの格言のようになって人口に膾炙していることは、社会的に健全な現象であるか、どうか。一体、この句を呟きたくなるときの気持はどんなものだろう。「ああ、言わずもがなのことを口にしたら、恐らく私の真意はわからなかったろう、いや誤解されたかもしれない。口は禍いのもと、おれも馬鹿だった、それにしても人の世は寒々とつれないものだ」。そこには後悔と自嘲とがある。(中略)ともかく、私はこの句を思い出すごとに、芭蕉の一部にある小ささ、というよりむしろ彼をしてかかる句を吐かした時代の矮小さを感じる。そして思う、こんな句の真实性がびったりわかるような人間がだんだん稀れになってゆくのでなければ、日本の社会がよくなったとは言えぬのだろうと。

動物はものをいわない。人間だけがものをいう。この天賦の機能を正しく用い、またこれを楽しまぬというのは間違いである。日本で従来、ものをアマリいわぬことを偉人になくはならぬ性質のように考えたのは間違いである。平常ものをいわぬ人が、たまたま口を開いたので、何をいうかと耳をかたむけると、馬鹿げきったことを鹿爪らしくしゃべっただけだった、そういう経験を私はいやというほどもっている。①私は沈黙の偉人などというものを信用しないことにしている。不言実行という言葉もあるが、それが不言実行にすりかえられていることが多いのであって、私は不言実行などという人より一言半行、いったことのせめて半分は必ず実行する人の方を重んじる。ものをいえば必ず社会的に何らかの責任を生じる。不言実行などというのは社会的に責任を

とるまいとすることであって、(中略)われわれは今後、大いにものをいうようにしなければならない。

がんらい日本語には、「黙れ」「やかましい」「もういい」「わかった」「うるさい」等々、②人の発言を封じる言葉がむやみに多い(たとえば『暗夜行路』をみよ)。西洋語には、少なくとも私のよく知っているフランス語には、③甚だ少ない。しかも「デゼ・ヴ」(お黙り)というような言葉を用いることは、一種の人権蹂躪と考えられている。このことは言語発表ということについて、日本がまだ極めて封建的だということを示している。

しかし、ものをいうことを遠慮するなといっても、それは人に通じないようなことを、勝手気ままに喋り散らしてよいということでは、もちろんない。自分の思うことを、ソツチヨクに、しかし筋道をたてて他人にわかるように発言することが必要なのである。そうすることは他人に対する社会的義務である。そのためには各人が、ものいいが上手になるように努力しなければならない。気のきいた言い方をせよ、というのでは決してない。自分にはつきりわかっていることを自信をもって明瞭にいうことが第一である。もちろん、地位の上の人に対しては尊敬をもって話さねばならない。デモクラシーといっても、社会には常に秩序がなくてはならぬからである。しかしそのために自分の所信をまげたり、卑屈になったりしては絶対にいけない。つまり話す態度には尊敬があっても、話されることについてはあくまで平等の立場でありたい。あるフランスの昔の文学者が、④王侯の前に膝を屈するが心は屈しないといった、その気持が大切である。従って大切なのは、地位の上の人々が、部下のまたは年少の者の話をきくときに、あくまで相手を喋らせ、しかもその至らぬところ、誤っているところは、おだやかに人間的に訂正してやるだけの雅量をもつことである。そうすれば、部下のものは進んで話すようになり、従ってよい意見も出てき、部内の空気は必ず明朗になり、仕事は進むにちがいない。ものいへば唇さむしの感を決して抱かせぬようにせねばならない。これができぬような人間はデモクラシーの時代に、人の上に立つ資格はないのである。そういう

X

的な話し方の他に私的なものいいについても工夫が必要である

二、三人の時はいいが七、八人や十人にもなると、日本人はきつと二、三人ずつかたまって、ひそひそ話をする。これは西洋流

にいうと大そう礼儀にそむくことであつて、座の人々に共通の話題について皆で喋るのがよいとされている。そういう時には頭のすぐれた人がおのずと座長のようになって、しかも自分一人が喋るのではなく、皆が話せるようにもつてゆくべきである。また一人だけ喋りちらすのも失礼だが、集りの中でつまらぬ浮かぬ顔をして黙りこくっているのは一そう無礼である。そういう人間は出てこないがよい。自分の意見や感想は遠慮せずというがよい。そのさい自分の学力や知識や経験のことを考えて、ひとに笑われはせぬかなどと心配するのはいらぬことである。他人の説の受け売りでなく、素朴そぼくのようでも自分自身が真実にそう思うことをいう、そして真実の言葉は必ず人を動かすものである。

こう述べてくると、何か喋り方についての修身(*)をきかせられているような気になるかもしれないが、ものをいうということは、社会生活においての一つの義務であると同時に、人生においての人間らしい楽しみの一つなのである。親しい友だちどうしの歓談、これ以上に喜ばしいものがあるうか。しかしその喜びを一そう大きくするために、面白く話すことを覚えるがよい。面白くというのはホラを吹いたり、下品なことを喋ったりすることではない。内容は同じことでも、それを聞き手の興味をひくように、いわばユーモアをまじえて話すのである。(中略)

ものいいなどは、どうでもいいというのは誤りである。各人が平等であり、また各人が人生を楽しむということがデモクラシーの目的であり、また条件でもある。^④真によき社会を作ろうと思つたならば、ものいいという一見些細せさいなしかし本当は大切なことを、ここでよく考えなおしてみる必要がある。

《注》

*1 芭蕉……松尾芭蕉。江戸時代の俳人。

*2 「ものいへば唇さむし秋の風」……芭蕉の詠んだ句。現在では「人の短所を言つたあとは、後味が悪く、寂しい気持ちがある。転じて、何事につけても余計なことを言つと、災いを招くということ」という

意味のことわざとしても用いられている。

*3 彼をしてかかる句を吐かした……彼にこのような句を詠ませた、の意味。

*4 蹂躪……ふみにじること。暴力的に侵すこと。

*5 封建的……かつて社会の制度であつた、「封建制度」の性質をもっているさま。一般に、上下関係を重視し、個人の自由や権利を認めないさま。

*6 デモクラシー……民主主義。市民に主権があり、市民の人権が保障され、法律によつて政治が行われる政治のあり方。また、広く一般に、人間の自由と平等を尊重する立場をいうこともある。

*7 修身……明治時代から第二次大戦終戦まで日本の教育で行われていた科目。道徳教育にあたる。

問一 部(a)「アマ」(b)「甚」(c)「ソツチョコ」のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直さない。

問二 X に入る言葉を漢字一字で答えなさい。

問三 部①「私は沈黙の偉人などというものを信用しない」とあるが、その理由を説明しなさい。

問四 ――部②「人の発言を封じる言葉がむやみに多い」とあるが、ここで筆者が言いたいことの説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 日本は、「黙れ」「やかましい」などの、人の発言を封じる言葉を積極的に用いるおそろしい社会だということ。
イ 日本は、「黙れ」「やかましい」などの、人の発言を封じる言葉を使うが、フランスでは使われないということ。
ウ 日本は、発言すること自体がよく思われない社会なので、西洋より気を付けて発言する習慣があるということ。
エ 日本は、私的な場では勝手気ままに喋り散らしてしまう人が多いため、発言を禁止する言葉が多いということ。
オ 日本は、ひとの発言を禁止することが多くみられる程度には、西洋に比べて人権意識が低い社会だということ。

問五 ――部③「王侯の前に膝を屈するが心は屈しない」とはどのようなことを例えたものか、具体的に七十字程度で説明しなさい。

問六 ――部④「真によき社会を作ろうと思うならば、ものいいという一見些細なしかし本当は大切なことを、ここでよく考えなおしてみる必要がある」とあるが、筆者はなぜこのように主張するのか。その理由を本文全体の内容をふまえて説明しなさい。

問七 本文の説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 筆者は、芭蕉の句は、一般によくある人間の価値観をあらわしているとして高く評価している。
イ 芭蕉の時代にはものいいをよしとするような時代性があつたのではないかと筆者は考えている。
ウ 筋道を立てて理解してもらいやすい発言をすれば、会社の空気がよくなると筆者は考えている。
エ 人間だけが持つものいいの機能を発揮し、デモクラシーの時代を築くべきと筆者は考えている。
オ 筆者は、人権意識が根づいていない日本は、西洋に比べて民主主義を達成しづらいとしている。

問八 松尾芭蕉の作である俳句を一つ選びなさい。

ア 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺
イ 古池や蛙飛びこむ水の音
ウ 菜の花や月は東に日は西に
エ 名月をとつてくれろと泣く子かな
オ 春の海ひねもすのたりのたりかな

二 次の文章は平野啓一郎『本心』第一章の冒頭部分である。これを読んで、後の問に答えなさい。

「――母を作ってほしいんです。」

担当者と同じく座ると、たった数秒の沈黙に耐えられず、僕の方から、そう口を開いた。もつと他に言いようがあったのかもしれない。

メールで既に、希望は伝えてあったので、確認程度のつもりだった。しかし僕は、それだけのことさえ最後まで言い果せず、途中で涙ぐんでしまった。

なぜかはわからない。母を亡くして、半年間堪えていた寂しさが、溢れ出してしまったのだろうか、その
X がこれかと、何となく惨めな気持ちになった。

それに、その不可能な単語の組み合わせが、単純におかしかったのだとも思う。――おかしくて泣いて悪い理由があるだろうか？

僕は、二十九歳になったところだった。

僕と母は、どちらかが死ねば、遺された方は一人になるという、二人だけの家族だった。そして僕は、二〇四〇年代の入口に立つて、時々後ろを振り返りながら、まだ① 呆然としているのだった。

もう母は存在しない。その一事を考えれば考えるほど、僕は、この世界そのものの変質に戸惑う。

簡単なことが、色々とわからなくなった。例えば、なぜ法律を守らなければならないのか、とか。……

用心していても、孤独は日々、体の方々に空いた隙間から、冷たく無音で浸透してきた。僕は慌てて、少し恥ずかしさを感じながら、誰にも覚られないように、その孔を手で塞いだ。

僕たちを知る人は多くはなかったが、誰からも仲の良い親子だと見られていたし、僕は母親思いの、大人しい、心の優しい青年だという評判だった。

話を簡単にしてしまえば、母の死後、僕がすぐに、VF（ヴァーチャル・フィギュア）を作るという考えに縋ったように見えるだろうが、実際には、少なくとも半年間、母のいない新しい生活に適応しようとする、僕なりの努力の時間があったのだった。

それは、知ってほしいことの一つである。

僕は、六月 Y 日生まれで、それが、「朔也」という名の由来になっている。「 Y 日」を、古い言葉で「朔」ということを、僕は母から何度となく聞いていた。

母に祝われることのない初めての誕生日から数日を経て、僕は不意に胸に手を当て、言いしれぬ不安に襲われた。

自分では、その都度うまく蓋をしたつもりだった体の隅々の孔が、結局、開いたままで、僕の内側に斑な空虚を作り出していた。僕は、外からの侵入者を警戒するあまり、僕自身が零れ落ち続けていたことに、気づいていなかったのだった。

体が軽くなる、というのは、大抵は何か快さの表現だが、僕はその腐木のような脆い感触に、これはいけない、と初めて自覚し、その解決策を考えた。

それが、僕が今、渋谷の高層ビルの中にいる理由だった。

死は勿論、平凡な出来事だろう。誰もが時、この世に生まれてきて、いつか死ぬ。これは、絶対に例外のない事実だ。取り分け、親が子供よりも先に死ぬというのは、まったく平凡なことに違いない。逆よりずっといい。そして、平凡なことを受け容れられない人間は、周囲を苛立たせる。――それはわかっている。僕の経験は平凡だ。ただ、ふと、どうしてそんなにみんな、何でも平凡なことだと思ひやすくなったのだらうとは、考えることがある。決して口には出さないけれど。

僕は結局、^②感情生活の落伍者^{らくぶしや}なりの手立てに頼ろうとしている。
ありがたいことに、そういう人向けのサーヴィスに目をつけた人もいるのだった。

担当者は、野崎^{のざき}という名の、僕よりも恐らく、一回り年上らしい女性だった。白いブラウスを着ていて、髪を短く切っている。メイクの仕方から、外国生活が長いのではないか、という感じがした。

ここに来る客では、泣き出すことも珍しくはないのか、彼女は、理解に富んだ表情で、僕が落ち着くのを待った。一重まぶたの小さな目が、よくわかりますよ、という風にこちらを見ていたが、観察されている感じもした。誇張でなく、僕は一瞬、彼女は受付用のロボットなのではないかと疑った。

ネットで済むはずの手続きを、わざわざ対面で行うのが、この会社の「人間味溢れる」特徴で、彼女はつまりは、そういう仕事に恵まれる人物なのだった。

「お母様のVFを製作してほしい、というご依頼ですね。」

「はい。」

「VFについては、おおよそ、ご存じですか？」

「——多分、一般的なことからいしか。」

「仮想空間の中に、人間を作ります。モデルがいる場合と、まったくの架空の人物の場合と、両方あります。石川^{いしかわ}様の場合は、いる方、ですね。姿かたちは、本当の人間と、まったく区別が付きません。たとえば、わたしのVFとわたし本人とが、仮想空間で石川様にお会いしても、まず、どちらが本物かは見分けられないと思います。」

「そこまで……ですか？」

「はい。あとでお見せしますが、その点に関しましては、ご信頼ください。話しかければ、非常に自然に受け答えをしてくれます。」

——ただ、^③心^{こころ}はありません。会話を^③統語論的に分析して、最適な返答をするだけです。」

「それは理解しています。」

「^(a)キョウ^ぎウ醒めかもしれませんが、どれほど強調しても、お客様は途中から、必ずVFに^④心^{こころ}を感じ始めます。もちろん、それがVFの理想ですが、その誤解に基づいたクレームが少なからずありますので、最初に確認させていただいてます。」

半信半疑だったが、想像すると、^④喜びというより不穏なものを感じた。彼女の口調は、製品の説明というより、僕自身の治療方針^⑤の確認のようだった。

(中略)

体験ルームは、^(b)イガイと平凡な応接室^⑥だったが、外部からは遮蔽^{しゃへい}されていて、壁には闘牛をモチーフにしたピカソのエッチングが飾られていた。かなり古色を帯びていて、しみもある。最近の精巧なレプリカなのか、二十世紀に刷られたものなのかは、わからなかった。

ヘッドセットを装着しても、何の変化もなかった。僕は、これから対面するVFが、AR^(*)方式で、現実^{てんか}に添加されるのか、それともヘッドセット越しに見ている部屋が、既に仮想的に再現された応接室なのか、本当に区別できなかった。

黒いレザーのソファの前には、コーヒーが置かれている。座って、それを飲めば、わかることだろうが。……

野崎が、二人を連れだって戻って来た。

一人は、薄いピンクの半袖シャツを着た、四十前後の痩身^{そうしん}の男性。よく日焼けしているが、僕とは違い、長い休暇中に、ゆっくり丁寧に時間をかけて焼いたらしい肌艶^{はだつや}だった。

もう一人は、紺のスーツを着て、眼鏡をかけた白髪交じりの小柄な男性だった。

「初めまして、代表の柏原です。」

日焼けした男の方が、白眼よりも更に白い歯を覗かせて腕を伸ばした。

僕は握手に応じたが、ウィンド・サーフィンでもやっているのだろうか、といった眩しい想像を掻き立てられた。続けて、隣の男性を紹介された。

「弊社でお手伝いいただいている中尾さんです。」

「中尾です。どうぞ、よろしく。暑いですね、今日は。——お手伝いと言っても、ただここでお話をさせていただきただけなのです。」

彼は、額に皺を寄せて、柔和に「ハガン」した。落ち着いた物腰だったが、こちらの人間性を見ているような、微かな圧力を感じさせる目だった。「お手伝い」というのがよくわからなかったが、僕と同じVFの製作依頼者なのだろうかと考えた。

同様に握手を求められたので、応じかけたが、その刹那に、ハッとして手を引つめた。実際には、それも間に合わず、僕は彼に触れ、しかも、その感触はなかったのだった。

「私は、VFなんです。実は四年前に、川で溺れて亡くなっています。娘がこの会社に依頼して、私を製作してくれたんです。」

僕は、物も言えずに立っていた。本物そっくりというのは、CGでも何でも、今は珍しくないが、中尾と名乗るこのVFは、何かが突き抜けていた。それが、僕の認知システムのどこをどう攻略したのかはわからない。誇張なしに、僕には彼が、本当に生きている人間にしか見えなかった。柏原と見比べても、質感にはまったく差異がなかった。

僕は、半ば救いを求めるように野崎を振り返った。彼女は特に、「どうです！」と誇らしげな様子を見せるわけでもなく、「気になることがあれば、何でも質問してみてください。」とやさしく勧めた。恐らく、彼女がVFに接する態度も、これを人間らしく見せている一因だろう。

彼の額に、うつすらと汗が浮いているのに気がついて、僕は驚いた。僕の眼差しを待っていたのか、それは、目の前で、静かに

しずくになって垂れ、こめかみの辺りに滲んで消えた。そのベタつくような光沢を、中尾は痒そうに、二、三度、掻いた。

僕は、反射的に目を逸らした。彼の足許には、僕たちと同じ角度で、同じ長さの影まで伸びていた。

「ちゃんと、足は生えていますよ。」と中尾は愉快そうに笑って、「そんな、幽霊を見るみたいな顔をしないで下さい。」と、腹の底で響いているような艶太い声で言った。

「すみません、……あんまりリアルなので。」

「中尾さんは、実は収入もあるんですよ。」と野崎が言った。

「——収入ですか？」

「これが仕事なんです。」と中尾が自ら引き取った。「ここでこうして、自分自身をサンプルに、新しいお客様にVFの説明をしているんです。それに、データの提供も。お金を受け取るのは、家内と大学生の一人娘ですがね。……かわいそうなことをしましたから、まあ、親として出来るせめてもの孝行ですよ。」

そう説明する彼の眼には、憂いの色があつた。しかも彼は、「親として出来るせめてもの孝行」と言うだけでなく、^⑤その手前で、「まあ、」と一呼吸置いてみせたのだった。

僕は、自分の方こそ、出来の悪いVFにでもなったかのように、不明瞭な面持ちで立っていたと思う。「話しかければ、非常に自然に受け答えをしてくれます。ただ、心はありません。」という、野崎の最初の説明が脳裡を過った。

彼はつまりAI（人工知能）で、その言葉のすべては、一般的な振る舞いに加えて、彼の生前のデータと、ここでの、何十人だか、何百人だかの新規顧客との会話の学習の成果なのだった。ただ、「尤もらしい」ことを言っているに過ぎず、実際、こうしたやりとりは、大体いつも、似たり寄ったりなのだろう。

第一、それを言うなら、柏原や野崎の言動こそ、僕が誰であろうと、そう大して変わらない、パターン通りの内容だった。彼らとて、一々、僕の心を読み取り、何かを感じ取りながら話をしているわけではなく、「統語論的に」応対しているだけに違いない。

「お母様を亡くされたと伺^{うかが}ってます。きっと、あなたのお母様も、私と同じように、VFとして立派に再生しますよ。娘はね、私と再会した時、本当に涙を流して喜んでくれました。もちろん、私も泣きましたよ。」^⑥——心から。」

僕は、中尾の姿に母を重ねようとした。しかしそれは、どう努力しても止めること^{とど}の出来ない、破れやすい、儚^{はかな}い幻影だった。それでも、母とまた、こんな風に会話を交わす日が来るという期待は、僕の胸を^⑦苦しみとしか言いようのない熱で満たした。わかった上で欺^{だま}されることを、やはり欺^{だま}されると言うのだろうか？ もしそれで幸福になれるなら？僕は絶対的な幸福など、夢見てはいない。ただ、現状より、相対^{たいたい}的に幸福でさえあるなら、残りの人生を、歯を喰^くい縛^くつてでも欺^{だま}されて過^すごしかねなかつた。……

《注》

*1 AR方式……実世界から得られる知覚情報に、コンピューターが情報を補足したり、センサーによる情報を加えて強調したりする技術の総称。

*2 CG……コンピューターによる図形処理によって描いた図形や動画。

問一 Ⅱ部 (a)「キョウ」(b)「イガイ」(c)「ハガン」を漢字に直しなさい。

問二

X

には「結局のところ」という意味を表す言葉が入る。次の漢字の中から二つ選んでその言葉を作りなさい。

下 容 語 足 言
受 句 投 拳 掛

問三

Y

に入る漢数字を書きなさい。なお、「朔」という漢字は、「月が死んでまたよみがえる様を表したもの」と言われている。

問四

Ⅰ部①「呆然」のここでの意味を説明したものとして最も適当なものを選びなさい。

- ア 精神的に未熟で落ち着きのない様子
- イ 後ろ暗いところがあり人目を避ける様子
- ウ 悲しい出来事に打ちひしがれている様子
- エ 取り返しのつかないことをしてあわてる様子
- オ 気が抜けてしまつてぼんやりした様子

問五

Ⅰ部②「感情生活の落伍者なりの手立て」とあるが、どういうことか。四十五字以上六十字以内で説明しなさい。

問六 ――部③「統語論的に分析して、最適な返答をする」とあるが、どういうことか。このことを説明したものとして最も適当なものを選びなさい。

ア 思いを伝えることよりも自然な受け答えをすることを最も大切なことと考えて、言葉を可能な限り省略し、以心伝心を実感できるような返答をすること。

イ 相手の心を理解しようとしたり、感情を動かしたりするのではなく、データ化された様々な状況から見出されたパターンによって、最も自然に感じられる返答をすること。

ウ 現実空間ではなく、仮想空間におけるコミュニケーションを研究の対象とし、超現実的世界における有効な言語を生み出していくべく、最新の返答を次々としていくこと。

エ 純粹に言語だけを用いて意思疎通をする場合においても、十分に意思疎通を行うことが可能になるような言語をもつばら追求し、最も具体性のある返答をすること。

オ サービス向上のためにこれまでの顧客の心理をデータ化し、AIによってデータを詳細に分析することで、顧客が最も快適に感じられる返答のみをするということ。

問七 ――部④「喜びというより不穏なものを感じた」とあるが、それはなぜだと考えられるか。このことを説明したものとして最も適当なものを選びなさい。

ア 対面で母を失った悲しみを受け止めてくれ、しかも生きている人間と見間違えるほど精巧なVFを作ってくれる会社に感謝の気持ちを持ち続けてきたが、心の有無をめぐっての顧客とのトラブルが絶えないと聞き、アフターサービスという点で、最後まで顧客に寄り添ってはくれないという欠点があるのではないかと、強い不安を持ったから。

イ 本当の母と全く区別がつかないようなVFを手に入れることは、生前の母とのむつまじい日々を取り戻せるようで、嬉しい出来事だと予想してきたが、これまでVFを購入してきた人の多くがクレーマーになったと聞き、VFに心を奪われるあまり、恩人にクレームを言うような人間に自分になってしまわないかという怖れが生じたから。

ウ 母が死んでしまったにもかかわらず、母との自然なやりとりをもう一度もたらししてくれるVFには、とても魅力を感じているが、一方で、人間の心を復元することによって、人間の死という重大な出来事さえも、この社会に存在しないものにしてしまう科学技術のあまりに強大な力に、破滅的な人類の未来を予期してしまっていたから。

エ 心を持たないにもかかわらず心を持つかのように感じさせるというVFには、母の再生および母との生活の再来という大きな喜びを期待してきたが、あまりにも精巧なVFには、生きている人間を全て仮想の存在に感じさせる効果があるように思われ、事実、少しずつ現実感を失いつつある自分に気づき、恐ろしさがわいてきていたから。

オ 心が感じられるほど精巧な母のVFを入手することは、失われた母を取り戻すようなものであり、そこには喜びもあると考えていたが、それよりも、VFを購入するということは、それなしに自立できないほど自分の精神が損なわれているということなのだと感じ、将来VFに心を感じているであろう自分が怖くなったから。

問八 ――部⑤「その手前で、『まあ、』と一呼吸置いてみせたのだった」とあるが、このことは「僕」に対してどのような効果があったというのか。これに答える次の一文の空らんに入るように、本文中から十字で抜き出しなさい。

中尾をより に見せる効果。

問九 ――部⑥「――心から」とあるが、この表記はどのような効果を読者にもたらすものと考えられるか。適当なものを二つ選びなさい。

ア V Fが心という言葉を用いていることに注意を向けさせることで、読者に違和感を覚えさせる。
イ 自分はあくまでV Fであり、生き返ったわけではないのだという中尾の悔しさが強く伝わる。
ウ V Fとなった中尾が娘と会った時に、非常に強い感情の高ぶりがあったかのように感じさせる。
エ V Fは脅威的な技術であり、科学技術のこのような使用は許されないことを強く訴えかける。
オ V Fは人間以上に豊かな心を持ち得ると暗示し、豊かな心を失った現代人に反省をうながしている。
カ 親子の死別は絶対的に悲しいものであり、悲しみをこらえる必要は一切ないと読者に訴えかけている。

問十 ――部⑦「苦しみとしか言いようのない熱」とあるが、どういうことか。説明しなさい。

問十一 平野啓一郎は第二二〇回芥川賞受賞作家であるが、芥川賞の創設を提唱した人物は誰か。

ア 菊池寛 イ 森鷗外 ウ 川端康成 エ 太宰治 オ 夏目漱石

